

領域「表現」科目におけるアクティブラーニングによる学びの考察

－幼稚園でのコンサート取組後のアンケート調査の分析－

Students' learning in the Area of "Expression" through Active Learning

"Analysis of the surveys of students after the concert efforts"

永津 利衣

愛知みずほ大学（非常勤）

Rie NAGATSU

Aichi Mizuho College

Abstract.

This study aims at investigating the effectiveness of "Active Learning" approach in teaching the subject of "Expression" by analyzing the junior college students' learning involved in a music concert based on follow-up questionnaires. We examined second-year students in the nursery school teacher training course who worked on a Christmas concert in a neighboring kindergarten as part of "Expression" class. In the preparations including ensemble practice, the students became aware of the significance of creating music with friends, whereas during the actual concert, they experienced two-way communication with the audience through music and tried to entertain the audience. In their rising awareness of interactions through music, students became more observant of and eager to be closer to children, indicating the development of their attitude needed in the area of "Expression" as childcare workers, and gained the improvement of musical skills and musical social significance in the collaborative learning. The questionnaire result indicates that there are individual differences among students, so post-learning to share individual learning is important.

キーワード: 領域「表現」; アクティブラーニング; コンサート; KH コーダー.

Keyword: area of "Expression"; active learning; concert; KH-coder.

背景と目的

子ども主体の遊びを重視する保育への動向がみられる中、領域「表現」においても、子どもが思いのままに表現することができ、その楽しさを十分に味わう経験が音楽に親しんでいく態度を養うとされている。つ

まり、保育者^{注1)}には表現に至らない子どもの心の動きの受容から、子どもの成長をとらえる観察眼、表現を支える援助や環境構成の知識・技能などが求められる。そして、「保育士等の大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、子ども

が音楽に親しむようになる上で、重要な経験」（厚生労働省, 2018a）となるため、ある程度の演奏能力があることが望ましい。そのためには養成の段階で、保育者としての歌唱を含めた演奏の基礎的スキルを習得し、豊かな演奏経験を積んでおきたいと考える。

本論は、愛知県内にある短期大学保育士養成課程の2年生が取り組んだ、近隣幼稚園への出張クリスマスコンサート（以下コンサート）の取組について取り上げた。コンサートの取組は、前述のような保育者の養成段階で養いたい能力を伸長できると考えられ、アクティブラーニング（以下AL）のいくつかの方法を用いて学習を進めた。ALとは「学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法」（文部科学省, 2012a）である。本取組の学習場面を、練習を含む準備段階と、コンサート本番の2つに分けると、前者は「グループの共通の課題を達成するために他のメンバーと協力しながら学習」（西野, 2015）する協同学習が中心となり、後者ではサービラーニング（以下SL）による学習効果が期待できた。SLとは「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム」（文部科学省, 2012b）である。つまり、幼稚園で生演奏を提供するサービス体験によって、学生は子どもや現場の様子から、進路としての保育について新たな視野を得ることができると考えた。しかし、学習チャンスは本番の1回に限定され、学生自身がそこで何を感じ取るかによって学びが左右されることが予想され、一定期間、継続的に地域へ出ることから学ぶSLとはこの点が異なる。

保育者養成課程の学生による学外での音楽活動（地域の福祉施設や親子を対象）を扱った先行研究では、学生の自由記述やアンケート調査などを基に、その学習効果がまとめられた（浦田他, 2016、他）。そこでは共通して、仲間と協同する能力の向上、達成感や自信といったコンピテンスにつながる意識の増加、子どもや保護者に対する気付きの獲得、演奏技術の向上が挙げられていた。伊藤（2019）は、このような活動は、経験を通して実践力、保育感覚を磨く学びの場であるが、保育士として主体的に成長する場とするには、学生が子育て支援の場で何を学び、どのような成長を遂げているか明らかにする必要があるとしている。一方、室町（2016）はわらべうた遊びを通して、学生の音楽指導能力や幼児期の音楽教育に関する意識の変化を明らかにしつつ、子どもと保護者への意識が具体的な課題として表れたことを述べている。このように学外の実践的な学びの場からいくつかの知見が得られている

ものの、学習を深める手だてを考えるにあたり、多様な実践方法がある中で、学生の学びをさらに整理し蓄積していく必要があるといえる。

また、高等教育における能動的学習へ質的転換を図る方策として、文科省よりALが推奨されてから、多くの研究がなされてきたが、ALの実施にはいくつかの課題もある。保育者養成校におけるALの実態を調査した上田ら（2017）は、「演習・実習科目が多い保育者養成においては、授業形態の多様性を踏まえると、授業の中でALを意識することなく取り入れている場合もあるだろう」と指摘しながら、収集した論文では能動性や学習との繋がりについて検討されていないものがほとんどで、ALによる力が保育者養成としてどのように寄与するのか明らかにする必要性を述べている。

そこで、本論ではコンサート終了後に学生によって書かれた自由記述および質問紙調査の分析から、学生の考えや感受を把握した。それを基に、コンサートという実践的学習がALとして、どのような学びが得られ、また何が課題であるのかを検討し、その上で領域「表現（音楽）」科目における学びとのつながりについて考察することを目的とした。領域「表現」科目における学習実践を蓄積することで、教員が「質の高い学習につながるように学習活動を設計し、実際に質の高い学習になっているのかどうかを確認」（中井, 2015a）する検討材料を提供できると考える。

方法

1. 分析の対象

「子どもと音楽」（2年生通年、選択必修）の受講者で、コンサート本番に参加した学生（保育士資格取得希望者）29名によって提出された自由記述と、質問紙調査を対象とした。

2. 調査時期

コンサート本番終了直後に自由記述の記入用紙を配布し、5日以内に提出してもらった。その後、質問紙調査を行った。

3. 研究の方法

- (1) 先行研究の調査
- (2) コンサートの企画と準備、練習
- (3) コン서트本番
- (4) 調査（自由記述および質問紙調査の実施）
- (5) 結果の分析と考察 自由記述についてはKHコーダー^{注2)}を用いて、質問紙調査については5件法による回答傾向から分析した。それぞれ分析結果に解釈を行い、学生の学びについて考察した。

4. 倫理的配慮

学生に研究の目的と方法を説明し、自由記述と質問紙調査を研究資料として使用するにあたり個人情報の保護と、成績への影響がないことを口頭と文書で説明し、全員から書面で同意を得た。

5. 取組の概要

(1) 取組期間 201X年11月～12月

(2) コンサートの日時と場所 201X年12月13日午前10時から10時30分、A幼稚園遊戯室

(3) コンサートの対象 A幼稚園の年少、年中、年長の約50名の園児。

なお、本番約1週間前に短大校舎エントランスホールにて1・2年生合同のクリスマスコンサートを実施しており、幼稚園向けに一部曲目と流れを変更した。自由記述に「観客」とあるのは、この時の教職員や学生の観客を含んでいるためである。

(4) 学生の活動内容 演奏曲を決定後、学生は1人1曲ずつ伴奏の器楽合奏をする担当曲を決め、担当曲ごとに集まった5名程度のグループで、教員の指導を受けながらリズム楽器を選び、ふさわしいリズム案を考え、楽譜に記した。歌は伴奏担当以外の学生全員で合唱した。楽器の練習は授業内や授業外に行ったが、授業外は学生が自主的に個別やグループで取り組んだ。本番は、司会担当の進行により進めた。

(5) 演奏曲目 幼稚園に予め子どもたちが知っている歌をたずね選曲の参考にした。学生の学習内容がクリスマス・ソングに偏らないようにし、季節を問わない子どもの歌から、子どもがその場で参加できるものを選曲した。「きよしこの夜」(20音のハンドベル合奏)「赤鼻のトナカイ」(手話ソング。一部を子どもに教える)「あわてんぼうのサンタクロース」(ドンドンなどの擬音語の表現)「楽しいね」(手拍子)「森のくまさん」(追いかけて歌)「コンコンクシャンのうた」「畑のポルカ」

(6) 使用楽器 大太鼓、小太鼓、ウッドブロック、タンブリン、カスタネット、鈴、ギロ、クラベス、ウィンドチャイム、鉄琴・木琴(鈴木楽器製オルフ楽器)、カホン

I. 自由記述

1. 分析の手続き

実施後の自由記述で得られたテキストデータについて、KHコーダー(樋口, 2004)を用いて分析を行った。まず、前処理の中の語の取捨選択では、「言葉／掛け」「保護／者」「クリスマス／コンサート」などのように1つの語として抽出したいものを予めタグ付けし、強制抽出するようにした。また、分析対象数が少ないた

め、同じ意味を表わす語は統一して不要なばらつきを減らした。例えば、「私」「こちら」「学生」などその学生自身が当事者であることを意味する場合は「自分」に統一し、「自分」が「子ども」を指す場合は「子ども／自身」(タグ付け)に言い換えた。「学生」の語は、学生の立場を表わす場合や、「自分」に言い換えると明らかに違和感がある場合に用いた。「お客さん」「聴いている人」は「観客」に統一した。なお、複数形の「子ども／たち」は、結果と考察において複数形に大意がない限り、「子ども」を総称として扱った。次に、共起ネットワークのコマンドにより、共起の程度が強い語同士を線(edge)で結んだネットワーク図を描き、一緒に出現する傾向のある語のまとまりをグループ化した(以下、本論ではこれをカテゴリーと称す)。その後、特定の抽出語を含む元のテキストデータを一覧にして見ることができるKWICコンコーダンスを用いた。このコマンドによって得られたテキストデータ一覧から、ある抽出語がどのような文脈で使われていたのか確認し、ネットワーク図で得られたカテゴリーごとに命名し、内容をまとめ、解釈を加えた。なお、テキストデータにあった語・文は「」で示し、「」内の()は必要に応じて筆者が要約や補足したものである。

2. 結果

KHコーダーによる分析から、29名のテキストデータから68件、総抽出語数1965、異なり語数402が得られた。表1は、抽出語リストのコマンドで得られた結果から、出現回数3以上の抽出語(45語)と各出現回数をまとめたものである。「子ども」「学ぶ」などの他に、「歌う」「演奏」など音楽特有の語が抽出された。

表1 自由記述の抽出語

出現回数	抽出語
39	子ども
22	学ぶ
18	大切
15	歌う
12	演奏
11	歌、自分
10	楽しい、感じる、仲間
9	楽しむ、曲、笑顔
7	リズム、練習
6	合わせる、伝える
5	クリスマスコンサート、ハンドベル、ピアノ、違う、音、音楽、覚える、見る、考える、司会

4	観客、気持ち、声、反応、必要、表情、初めて
3	まね、一人一人、協力、合う、姿、時間、前、速い、弾く、知る、難しい

図1は、出現回数3以上、共起関係(線)の描画数60の設定で描き出されたネットワーク図である。これにより7つのカテゴリー；①歌うことと子ども、②仲間との演奏、③曲、④大切だと感じたこと、⑤リズムや音楽、⑥初めてのクリスマスコンサート、⑦観客、が現れた。

次に、これらのカテゴリーごとに、KWIC コンコーダンスのコマンドを用いて、対象の抽出語を含むテキス

トデータの一覧を得た。そして、カテゴリー内の他の抽出語とどのような文脈で使われているか、あるいは、他のカテゴリーで抽出された語との関係や傾向を探ることで、そのカテゴリーで述べられていたことを数点にまとめた。例えば「子ども」という語が出てくるテキストデータの一覧から、元のテキストにおいて、その「子ども」がどのような文脈で使われていたのか確認した。その上で、「子ども」がカテゴリー内のその他の抽出語とどのような関係で使われていたのか、全体的な傾向を探った。これにより、そのカテゴリーの内容について考察を行った。

以下は、各カテゴリーで述べられた内容をまとめた。

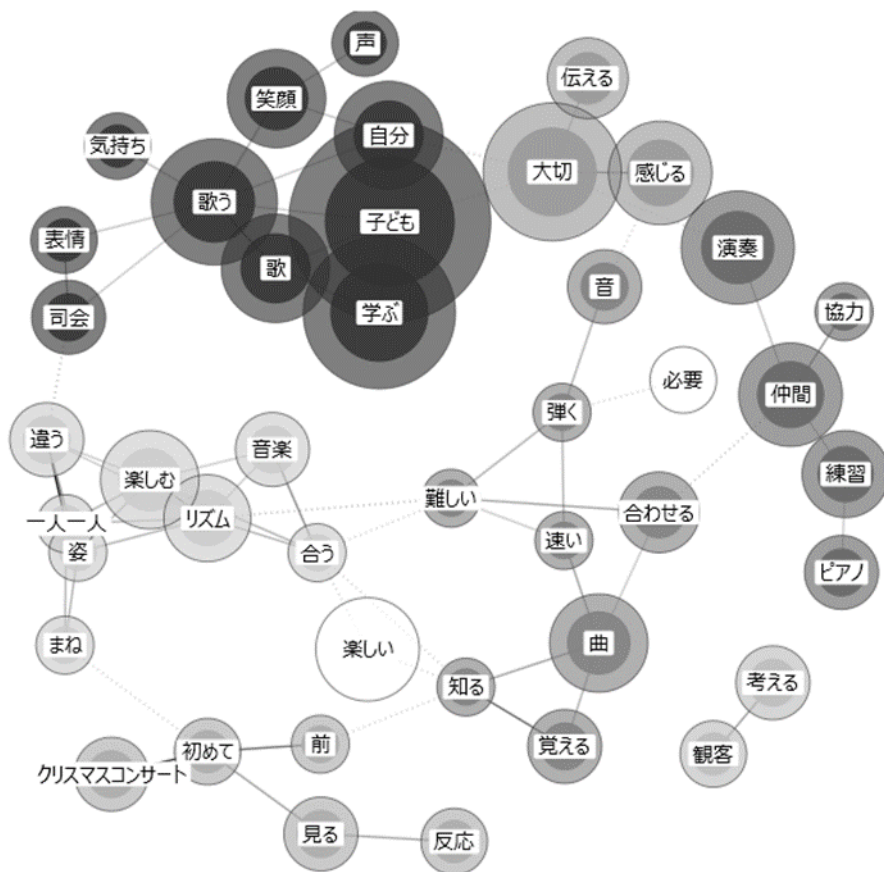


図1 自由記述の共起ネットワーク

(1) 子どもの様子

「歌う」を中心に「子ども」「自分」「笑顔」などで構成された。KWIC コンコーダンスによりこのカテゴリーの内容を探ったところ、①子どもの様子、②演奏の影響、③歌を歌うことの意義、について述べられていた。

①子どもの様子：「まねをし」たり、「子ども自身で振

り付けを考え」たり、「友達とその場を共有し」たりするなど、さまざまに「歌や演奏を楽し」む子どもの様子が多く記述された一方、「歌を歌っている時、耳をふさいでいる子どもや、少し飽きている子ども、落ち着きのない子ども」をとらえた記述もみられた。このように「(子どもは) 音楽を通していろいろと表現できること」や「いろいろな子どもどもがいるこ

と」を「学んだ」と述べられていた。別れ際の子どもの交流では、「自分からハイタッチをしに行くことで、子どもたちも心を開いてくれる」というように、自ら関わり掛けることと身体的な触れ合いにより、子どもと通じ合うものを感じ取ったことがうかがえる。一方、「納得のいかない結果だったが、子どもたちの笑顔が見られてよかった」では、子どもの「笑顔」によって省察が曖昧になっている。

②演奏の影響：「自分自身が楽しんでやることで、子どもたちも歌を歌い、笑顔になる」というように、自分たちの演奏や表現が子どもに楽しい気分を生起させたことが観察された。その反応に学生は満足感を得ており、学生（演奏者）と子ども（聴き手）の双方向コミュニケーションが生じている。

③歌を歌うことの意義：「歌を歌うことで情緒が安定したり、気持ちがよくなったり」、「歌で気持ちを伝えることができる」というように、歌による気分の好ましい変化や気持ちの伝達が感受された。コンサートという対面構成により学生は音楽に対する子どもの反応を観察し、音楽の影響を感じ取っていた。

(2) 仲間との演奏

「仲間」を中心に「演奏」「練習」などで構成されていた。KWIC コンコーダンスによりこのカテゴリーの内容を探ったところ、①仲間と音楽する楽しさ、②演奏に関すること、③練習の重要性、について述べられていた。

①仲間と音楽する楽しさ：「仲間で話し合っってアレンジ」や「速さ」の相談をしたり、「できない仲間へのフォロー」をしたりするなど、学生間で話し合いや援助をしながら練習が進められており、「仲間と協力して楽しく演奏することの大切さを学んだ」という記述が多くみられた。また「仲間と練習を積み重ねることで団結力が生まれたり、息を合わせて演奏することができる」ことや「全員が同じ気持ちで演奏すること」「よい演奏ができた」と体験的に学ばれていた。また、「他の職員との協力が大事」という将来の職場を想定した意見もみられた。

②演奏に関すること：「速さ」や「音の強弱」の工夫、ピアノのペダリングといった音楽表現に関することが述べられていた。

③練習の重要性：「あまり時間がなくて不安でいっぱい」の中で「計画的に」「少しの時間でもコツコツと」「あきらめずに練習」することで「完成度も高くなるし、自信にもつながる」ことが体験されていた。さらに、「目標に対して頑張ること」「達成感を味わうこと」を「子どもたちに伝えていきたい」という考えもみられた。

このように仲間との演奏には話し合い、つまり言語

によって演奏を深める面がみられた。また励まし合っって練習を重ねることや、息の合った音楽を共有することで、仲間との一体感が得られていた。

(3) 曲

「曲」を中心に「覚える」「合わせる」「難しい」など演奏に関する語で構成されていた。KWIC コンコーダンスによりこのカテゴリーの内容を探ったところ、①レパートリーの増加、②合わせることの難しさ、について述べられていた。

①レパートリーの増加：「季節に合った曲を知り(略)」

「知らない曲がほとんど」という記述より、保育で歌われる歌のレパートリーが増えたといえるが、反対にもともと子どもの歌をあまり知らないことがうかがえた。また、「しっかりと歌を覚えていなければ、笑顔ではきはきと歌を歌うことができない」というように、歌い込みがよい演奏につながるものが体験的に学ばれた。普段から指導を受けてきたことであるが、子どもたちに喜んでもらった（(1)②で前述）という肯定的な体験によっても、身をもって練習の重要さが実感されたといえる。

②合わせることの難しさ：「ピアノ伴奏」を「大勢の歌声に合わせる」難しさや、「ハンドベル」で「リズムを合わせること」が「難しかった」と述べられていた。

(4) 大切だと感じたこと

「大切」「感じる」「伝える」の3語で構成されていた。KWIC コンコーダンスを用いた確認により、このカテゴリーでは、「大切」であると「感じ」られたことが述べられており、仲間と音楽する楽しさや練習の大切さ（(2)で前述）の他に、伝えることが挙げられた。伝えるために「手振り身振り」をつける工夫がされ、観客に「しっかり伝える、伝わるように」という意識が大切と感じ取られていた。自分の発信した表現が相手に届き、受け取られるまでが考慮されたとうかがえる。また、伝える体験として「人前に出るという経験はとても大切」と述べられていた。

(5) リズムや音楽

強い共起の「リズム」「楽しむ」を中心に「音楽」「違う」「一人一人」などで構成されていた。KWIC コンコーダンスを用いた確認により、このカテゴリーでは、①子どもがリズムや音楽を楽しむ様子、②仲間とリズムを合わせること、③音楽することの意義、について述べられていた。

①子どもがリズムや音楽を楽しむ様子：学内コンサートとの比較（「観客が大人の時と子どもの時とは反応がとても違い」）、および、子ども「一人一人」の表現の「違い」（(1)で前述）が述べられていた。

②仲間とリズムを合わせること：「リズムを合わせる」

難しさ、「難しかったからこそ、リズムが合った時は嬉しかったし、音楽を楽しむことができた」という達成感が述べられていた。

③音楽することの意義：「音楽する（略）ことにつながる」ことや、コール&レポンスによる「その場を共有」が感受された。「保育の中で音楽を取り入れることは、子どもたちにとっても自分にとっても大切だ」という考えもみられた。

(6)初めてのクリスマスコンサート

「クリスマスコンサート」「初めて」などで構成されていた。KWIC コンコーダンスを用いた確認により、このカテゴリーでは、「クリスマスコンサート」で「初めて」子どもの「前」に立った経験からの感受が述べられていた。「自分たちが楽しむことも大切だが、子どもの反応を見ながら演奏することも大切」という意見には、子どもに合わせようとする視点の広がり、子どもと音楽の楽しさを共有したいという心情がうかがえた。

(7)観客

「観客」と「考える」で構成されていた。KWIC コンコーダンスを用いた確認により、このカテゴリーでは、事前準備において「どうしたら子どもや観客が楽しめるか」仲間と「考えた」だけでなく、(1)②で考察したように、演奏中に子どもや観客と双方向に影響し合うことから、「自分のためだけではなく、観客のためにもと考えることが必要」と感じ取られていた。

3. 考察

結果で得られた以上の事項は、共通の観点から次の4つにまとめることができると考えた。4つの項目とは、音楽や演奏に関すること、音楽場面における子どもの観察、保育への展望、事前準備と本番の2つの過程を経た成功体験、である。以下は、各項目の学生の学びや感受について、コンサートの実施という学習を通して解釈を行った。

(1)音楽や演奏に関すること

自由記述で、合奏を通して次のような社会的要素が見出された。

ア. 演奏を向上させるために、速さや音の強弱を工夫したり、ピアノの演奏技術を高めたりして、音楽的表現の工夫(2)②)がなされていた。しかしそれ以上に、仲間との協力や話し合いによって合奏の難しさを仲間と乗り越える喜びを感じ、共に音楽の楽しさを味わうこと(2)①(5)②)や、仲間と「同じ気持ち」で「息」を合わせることが大切だと感じられていた。つまり、学生の振り返りでは、演奏の技術面以上に、楽しさや団結、息を合わせるといった、他者と関わり合う社会的な関係の中で生じる気持ち

や感覚への焦点化が大きいといえる。

イ. 本番では子どもや観客(聴き手)に喜んでもらうための演奏(7)が心掛けられ、楽しさを伝え(4)共に楽しみたいという心情がうかがえた。また、子どもの前に立つことで、子どもに合わせる事が大事(6)であるという視点をもつことができた。つまり、自分も楽しめなければ他者にもその気分を伝えることはできず、音楽の楽しさを共有したいという社会性のある演奏が目指され、演奏における利他的な視点の育ちを読み取ることができた。

(2)音楽場面における子どもの観察

音楽場面のさまざまな子どもの様子が観察されていたが、コンサートという対面式が観察を容易にし、学生たちの演奏や言動に対して子どもたちの反応がダイレクトに返ってくることが、より学生の観察眼をとらえたと考えられる。

(3)保育への展望

就職が近づいた時期であり、以下のように将来の保育現場を想定しており、保育者になるという自覚をうかがうことができた。

ア. 実際に音楽する子どもの観察から、歌を歌うこと

((1)③)や音楽でつながることなど、音楽することの意義(5)③)を感じ取り、保育に音楽を取り入れたいという考えが得られた。

イ. コン서트本番を経験することで、学生自身が得た練習の大切さ((2)③、(4))やあきらめないこと、そして、それが自信や達成感につながることを子どもに伝えたいという考えが得られた。

ウ. 他の職員との協力が大事((2)①)という気付きには、実際の幼稚園の遊戯室で、学生同士が協力して運搬、セッティングをし、コンサート=行事を進行した経験から生じたのではないだろうか。

(4)事前準備と本番の2つの過程を経た成功体験

子どもたちに楽しんでもらえるように仲間と考え、試行錯誤しながら事前準備を進めた(7)。迎えた本番では、子どもたちと楽しさを共有したいという気持ち((1)②)で演奏し、実際に子どもたちが楽しんでいったという結果が得られた。多くの学生が、仲間と協力し自分たちで事前準備と本番を進めたという自負とともに満足感や達成感を得ており、この2つの段階の過程を積み重ねることによってもたらされた成功体験といえる。この点はプロの演奏家を招聘したアウトリーチとは異なるといえるであろう。

II. 質問紙調査

1. 手続き

本調査は、このコンサートの取組を通して、学生自身が、楽器活動を展開する実践力への見通しや演奏評価

を、どの程度得ているのかを探ることを目的とした。以下の5つの質問を5件法でたずね、回答は「できない」「あまりできない」「どちらでもない」「まあまあできる」「できる」(質問4、5は過去形)とした。その回答の割合から学生の傾向を探った。

質問1：あなたは、子どもの歌の曲想にふさわしい楽器を選ぶことができますか。

質問2：あなたは、子どもの歌に合わせて簡単なリズムを作ることができますか。

質問3：あなたは将来、子どもが楽器活動を行うときに、適切な指導・援助を考えることができますか。(現在の段階で)

質問4：あなたは演奏中に、音楽的な表現(強弱、音色、クレッシェンドなど)を工夫して付けることができましたか。

質問5：あなたは演奏中に仲間とリズムや気持ちが合う楽しさやノリを感じることはできましたか。

2. 結果と考察

図2は質問1から5の回答結果を度数で示したものである。

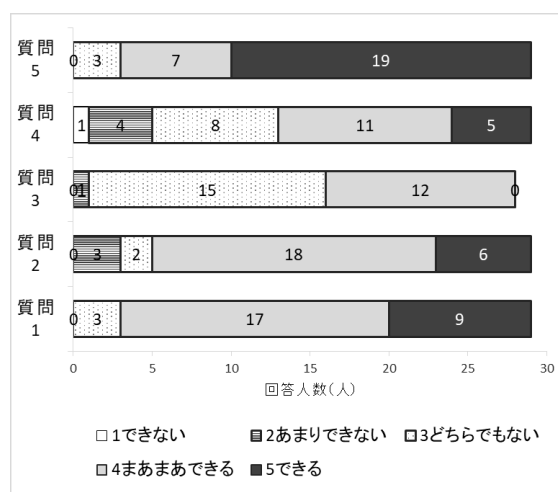


図2 質問紙調査の回答結果

グラフは左から「1 できない」「2 あまりできない」「3 どちらでもない」「4 まあまあできる」「5 できる」の回答人数を表している。

楽器選択(質問1)では26名(89.7%)、リズム作り(質問2)では24名(82.8%)の学生が「できる」「まあまあできる」と回答した。しかし、子どもへの楽器活動の適切な指導・援助の考案(質問3、1名未回答)は、12名(41.4%)が「まあまあできる」と見通しをもったが、15名(57.1%)が「どちらでもない」、1名が「あまりできない」と回答した。つまり、曲にふさわしい楽器を選ぶことや、簡単なリズムを作ることに

見通しをもっている学生は多いが、子どもへの援助・指導となると、保育実習等以外で経験がないため、学生にとっては未知数であることがうかがえた。今回のような経験を参考にして、保育現場で子どもの実態や園の方針に合わせて切磋琢磨していくことが望まれる。演奏における音楽的な表現(質問4)は、13名(約44.8%)が「どちらでもない」「あまりできない」「できない」と肯定的ではない回答をしており、半数弱の学生が強弱などの音楽的な表現に難しさがあることがうかがえた。一方、演奏における仲間との一体感やノリ(質問5)を26名(89.7%)が感じており、多くの学生が自由記述でもみられたような合奏の醍醐味を味わっていたことがわかる。この2つの結果をまとめると、学生は合奏の一体感やノリを感じることはできたが、半数弱の学生は音楽的な表現に何らかの課題があるといえる。つまり、半数弱の学生には、ニュアンスを表現するための技能が身に付いていない、あるいは、音を正確に出すことで精一杯でニュアンス表現まで意識がまわらない、緊張してできない、などが想定できる。さらに、リズム作り(質問2)、音楽的な表現(質問4)で「あまりできない」「できない」と回答した学生は3から5名おり、表現技能の習得のつまずきが考えられる。なお、日頃の練習に励んでいたものの当日体調不良で参加した1名は5項目を通して低い点で回答していた。

総合考察

ここでは、自由記述と質問紙調査の結果や考察を基に、ALによるコンサートの取組の学習の成果や課題について、領域「表現(音楽)」科目の学習の視点でまとめていく。

1. 領域「表現(音楽)」科目におけるALによる学び (1)音楽に関する知識・技能の習得

音楽に関する仲間と共に音楽の楽しさを味わい、合奏において団結や息を合わせることが大切である、と考えられたことを挙げた。質問紙調査の質問5において、多くの学生が演奏で仲間との一体感を感じたと回答したと共通している。仲間と練習を積み重ねながら、個々の音楽技能を高め合い、音楽的表現を試行錯誤して、他者とハーモニーやノリを創り出していったことがうかがえる。これらのことから、合奏という協同学習により、学習者が助け合いながら、個人やグループの音楽的課題を能動的に解決したことになり、ALの学習成果といえる。

さらに、質問紙調査の質問1・2で、多くの学生が曲にふさわしい楽器選択や、簡単なリズム作りができると見通しを得ていることが明らかになった。仲間と楽しみながら能動的に練習を繰り返す中で、楽器の特性

や扱いに関する知識、リズム演奏の技能を体得していったのではないかと考えられる。

しかしその一方で、質問紙調査の質問4で、約半数弱の学生は強弱などの音楽的な表現に何らかの課題を残していることが明らかになった。音楽的な表現とは、楽譜を読み取り音に変換する作業から一步深まり、音楽の表情を豊かに表現する力である。この点は次の2.課題で取り上げる。

(2) 音楽を通した人間関係の築き

この取組では、音を合わせる難しさを仲間と乗り越える喜びや、仲間と音楽する楽しさという感情体験が得られていた。また、子どもや観客に楽しさを伝えようと演奏がなされており、他者との関わりの中で音楽するという社会的な意義が見出されていた。クリストファー・スモール（1998 野澤・西島(訳), 2011）は著書「ミュージキング」の中で「音楽パフォーマンスを、特別に組織された音を通して行われる人間同士の出会いとして見ようとし始めている」と述べ、演奏や音楽表現を作品の再現以上に、人間の音楽行為や関係性としてとらえることを提唱している。すなわち、この取組では、学生同士の間には、言葉や音を使って関わり、音楽する楽しさを共有する関係が作られ、聴き手との間には、音楽の楽しさを伝えようと子どもや観客に向かって演奏がなされ、関係を築こうとされていた。このような音楽を通して他者とつながる体験は、子どもが音と出会い、音楽を楽しむことを支える保育者として、基本的に重要な学びといえるであろう。

(3) 保育への展望と学び続ける保育者の育成

自由記述の考察で挙げた音楽場面における子どもの観察や、保育への展望は、実際に幼稚園でコンサートを行うことで得られた視点であり、SLの機能が活かされていたといえる。目の前のリアルな子どもの様子をとらえ、将来の保育現場を想定し、歌うことについて考えをめぐらし、音楽でつながりたいと感じたり、協力やチームワークの大切さを気付いたりしていた。このように保育者としての素養が養われつつあることを学生自身が実感できたのではないだろうか。このような自分自身の成長の実感、「生活体とその環境と効果的に交渉する能力」（大木, 2000）である有能感（コンピテンス）を高めたと考えられる。

このような展望を得た反面、質問紙調査の質問3の回答結果が示すように、子どもへの楽器活動の適切な指導・援助の考案といった現実的な事項では、保育経験のない学生にとって未知数であることが読み取れる。今後、保育現場で子どもの実態に沿いながら、切磋琢磨していくことが求められる。そのため、養成段階では基礎的事項を習得するとともに、学び続ける姿勢を養うことが大切となる。ところで、自己効力感の強い

人は、困難や課題を乗り越えていく能力が高いといわれ（バンデューラ, 1997 本明・野口(訳), 1997）、保育者としての資質能力向上に向け学び続ける（厚生労働省, 2018b）ことが自発的になされるであろう。自己効力感とは、「自己の行動の遂行可能性の認知、すなわち、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信」（嶋田, 2002）である。自由記述の考察(4)で挙げた、事前準備と本番の2つの過程を経て得られた成功体験は、学生の自己効力感を高めたと期待できる。このように実践を通して、学生自身ができる自分を確認し、自信をつけて人間的な土台形成をしていくことは重要で、就労後も学びや就労の継続に貢献できると考える。

以上、仲間との協同、自己の達成感や自信、子どもに対する気付き、演奏技術などの向上は、先行研究において挙げられた内容と共通しており、本論においても同様の結果が得られた。

2. 領域「表現（音楽）」科目におけるALの課題

(1) 音楽的な表現の深める指導

合奏において「息を合わせる」「同じ気持ちで」と述べられたことは、演奏の上でとても重要な感覚である。同じテンポを共有する中で、生き生きとした拍子感やリズムを仲間と共に感じ取っていたことが推測され、学生たちは音楽を感覚的につかんでいたことがうかがえる。そこで、課題として挙げたいことが2つある。

1つ目は、学生がつかんだ音楽の生きた感覚を、意識的に言葉へ転換することを試みたい。言葉を用いて表すことで、言葉を手掛かりに表現を探索することが予測され、音からイメージを広げ、イメージを音で表わそうとするであろう。その中で音や音楽を集中して聴き、微細な注意力を高めたり、多様な響きを体験したりするであろう。そうやって養われた感性は、やがて保育現場で、思いのままを自由に表わす子どもの表現、あるいは外には現れてこない子どもの内なる思いへの感度を高めることにつながっていくのではないだろうか。

なお、一見してわかっていそうで実際に混同されがちなテンポ、リズム、拍子などの音楽用語を演奏場面で学び直すことで、体験的に定着させることができるであろう。

もう1つは、豊かな演奏に向けた指導である。「教員が知識を提供する時間とALの時間とをバランスよく設定すること」（中井, 2015b）が大切であるが、本取組においては、練習中に教員が各グループを巡回し、助言を行った。例えば、リズムパターンや奏法を考える場合、サンプルを例示して比較させたり、質問したりすることにより、学生自身が曲想にふさわしい表現を

考えることができるようにした。音楽技能を習得し、深めていくには、学生の協同学習だけでは解決できないことも多く、教員が演奏や表現の技術指導をする必要がある。

(2) 音楽的な表現など課題の残る学生への対応

一方、何らかのつまづきがみられる学生への対応も重要である。総合考察1(1)で先述したように、強弱などの音楽的なニュアンスの表現に課題があると思われる学生が約半数弱おり、簡単なリズム作り(質問2)に困難を感じている学生が1割程度みられることが明らかになった。そこで、練習の中で基礎的学習事項を実際の演奏と結びつけながら再度確認し、定着を図るようにするなど、取りこぼさない指導の工夫が要される。ALの協同学習の中では、このような未習熟のある学生は埋もれてしまう可能性があり、個々の基礎力の定着度合いを確認しながら進める配慮が必要といえる。事前準備の練習を確実にすることができれば、コンサート本番で堂々と演奏でき、子どもからはダイレクトに反応が返ってくる。このような好循環は、学生自身の学習の励みになるであろう。

3. 個人差を埋める事後指導

自由記述と質問紙調査の結果では、保育者に向けた成長がみられる一方で、「子どもたちの笑顔が見られてよかった」という自己満足で終わる記述(自由記述2.(1)①)もみられた。ボンウェルとアイソン(1991松下記, 2015)がALの一般的特徴として挙げた5点^{注3)}のうち、「高次思考(分析・評価、総合)に関わっていること」に薄さが顕著であり、このような個人差を埋めるために事後指導が重要となる。

学生個人の記述にはさまざまな気づきや考えが述べられており、それらを意見交換することで、個人の学びを他の学生と共有し深めていくことができるであろう。例えば子どもの観察では、表面的なとらえから内面の心の動きを推測したものまでみられた。それを意見交換することによって、仲間の多様なとらえ方に触れることができ、楽しさや笑顔だけをよしとする評価から一歩踏み込み、自分のどのような行動が子どもに影響したのかという視点で省察をしたり、子どもの観察を進める上で新たな視点を得たりすることができる。時には教員がファシリテートすることで、学生が自力で見つけ出すことが難しい点を焦点化し、考察を深めて次の学習課題へつなげるように促すことも必要である。また、他科目と連携し、総合的に学習を深めていくことも有効である。

4. まとめ

井上(2017)は、音楽のアウトリーチ活動は教員主

導型でありながら「協同的取組として、体験学習、プレゼンテーション(発表)、ディスカッション等をとまなうことから戦略性の高い教育プロセスによる構造をもつもの」と述べている。さらに河合塾(2014)による区分(知識定着を目的とする一般ALと、課題解決を目的とした高次AL)を引いて「1つのプロジェクトとして対象のニーズに適した音楽活動を提供するためのプロセスから、高次ALに近い内容をもつもの」としている。

本取組においても、グループで合奏を仕上げる協同的取組の中で、話し合い(ディスカッション)や援助協力などがみられ、領域「表現」科目で習得したい知識・技能の一つである音楽の演奏技能を、教員の援助を受けながら、仲間関係の中で切磋琢磨して向上させることができた。ただし、一部の学生にはより丁寧な指導が必要であることも明らかになった。そして、プレゼンテーションとしての本番では、学生は演奏しながら、子どもの歌うテンポや息づかいに合わせようと演奏を調性したり、子どもが初めて行う手話をわかりやすく伝えようと工夫したりしていた。つまり、子どもの観察に基づき、子どもに合わせて音楽を提供しようとする能動的な思考と実践がなされており、子どもの表現への共感や、表現によって主体となる子どもに寄り添うという、この科目の重要な課題が実践的に学ばれていたといえる。この点は、井上論文より引用した課題解決を目的とした高次ALに相当する。したがって、領域「表現」科目において、「戦略性の高い教育プロセスによる構造をもつもの」として、本コンサートの取組を位置付けることができるであろう。

しかし、学生全員が同質の学びを獲得するには次の2点を充足することが重要と指摘した。1点目は総合考察2(2)で挙げたように、練習での生きた演奏において、基礎的学習事項の再確認と定着を図る指導の工夫である。2点目は総合考察3で挙げたように、ALの一般的特徴の1つ「高次思考(分析・評価、総合)に関わっていること」を補うための事後指導の充実である。また、ALでは、実際の活動実践の中で偶然起こったことに学習が起因する可能性が高く、科目がねらおうとしている学習内容が網羅されているか点検する全体的な指導の視野も必要であると考えられる。

注1) 保育者とは、保育士、幼稚園教諭、保育教諭をさす。

注2) KHコーダーは樋口によって開発され、分析者の主観を排除して、文章データテキストデータ分析用のフリーソフトで、近年ではアンケート調査のような分析に多用されている。テキストマイニング、計量テキスト分析と呼ばれる方法である。

注 3) AL の一般的特徴 (ボンウェルとアイソン, 1991 松下 (訳), 2015)

- (a) 学生は、授業を聴く以上のかかわりをしていること
- (b) 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること
- (c) 高次思考 (分析・評価、総合) に関わっていること
- (d) 学生は活動に関与していること
- (e) 学生が自分自身の態度や評価観を探究することに重きが置かれていること

引用文献

- 伊藤孝子 (2019) : 保育士養成課程を有する大学における子育て支援活動—「ぶんぶんひろば」の教育的意義について、滋賀文教短期大学紀要、21、51-63.
- 井上幸一 (2017) : アウトリーチとアクティブ・ラーニングについての考察 1—高等教育における音楽によるアウトリーチ活動、福岡女子短大紀要、82、13-21.
※このアウトリーチ活動とは、プロの演奏ではなく、学生主体の音楽活動が取り上げられていた。
- 上田敏丈他 (2017) : 保育士養成校におけるアクティブ・ラーニング活用の実態と課題に関する研究、名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化科研究、28、37-48.
- 浦田真理子・山口真理・平野光佐登 (2016) : 幼児保育学科学生による音楽ボランティア体験—意識の変容と表現力の向上に着目、松本短期大学研究紀要、25、87-96.
- 大木祐治 (2000) : 学習の成立と理論、内田輝彦・増田公男 (編) : 要説 発達・学習・教育臨床の心理学、109、北大路書房.
- 河合塾 (2013) : 「深い学び」につながるアクティブラーニング—全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題、東信堂、井上幸一 (2017). アウトリーチとアクティブ・ラーニングについての考察 1
- クリストファー・スモール (1998) 野澤豊一・西島千尋 (訳) (2011) : ミュージッキング—音楽は〈行為〉である、32-33、水声社.
- 厚生労働省 (2018 a) : 保育所保育指針解説 第 2 章 3(2) オ 感 性 と 表 現 に 関 する 領 域 「 表 現 」 ⑥、274、フレーベル館.
- 厚生労働省 (2018b) : 保育所保育指針解説 第 5 章 職員の資質向上、344-354、フレーベル館.
- 嶋田洋徳 (2002) : セルフ・エフィカシーの評価、坂野雄二・前田基成 (編) : セルフ・エフィカシーの臨床心理学、47、北大路書房.
- 中井俊樹 (2015) : アクティブラーニング、8、玉川大学出版部.
- 中井俊樹 (2015) : アクティブラーニング、11、玉川大学出版部.
- 西野毅朗 (2015) : 学生を相互に学ばせる、中井俊樹 (編) : アクティブラーニング、105、玉川大学出版部.

バンデューラ 本明 寛・野口京子 (訳) (1997) : 激動社会の中の自己効力、3-6、金子書房.

樋口耕一 (2004) : テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合、理論と方法、19(1)、101-115.
<http://khc.sourceforge.net>

KHcoder Ver. 3. Alphs. 13c (2018. 4. 30 取得)

ボンウェルとアイソン (1991) 松下佳代 (訳) (2015) : アクティブラーニング—教室に躍動を生み出すアクティブラーニング—大学授業を進化させるために、1、勁草書房.

室町さやか (2016) : 保育士養成課程の学生によるわらべうた講座の実践—地域における子育て支援と学生の学び、学校音楽教育研究、20、241-242.

文部科学省 (2012a) : 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて、中央教育審議会.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo00/toushin/1325047.htm

文部科学省 (2012b) : 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて、用語集、38、中央教育審議会.

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf

謝辞

KH-coder を用いた分析において丁寧なご指導を賜りました名古屋市立大学の古賀弘之先生に心より感謝を申し上げます。また、研究協力を快諾してくださった学生のみなさんに感謝申し上げますとともに、保育者としてのご活躍を祈念いたします。

付記

本稿は平成 30 年度日本音楽教育学会第 49 回岡山大会においてポスター発表した一部を修正・加筆したものである。

本論は、2019 年度愛知みずほ大学研究倫理審査委員会の承認を受けている。